

	第5章 多義 (polysemy)	Cruse
第二部 意味構造	第6章 上位下位と全体部分	Cruse
	第7章 対義 (antonymy and complementarity)	Cruse
	第8章 メタファー	Cruse
	第9章 イディオムから構文文法へ	Croft
第三部 文法構造	第10章 構文文法 (construction grammar)	Croft
	第11章 使用依拠モデル (usage-based model)	Croft
	第12章 結論	Croft

つまり、序論である第1章の後、I. 言語分析に対する概念的アプローチ (2章~4章)、II. 語彙論に対する認知的アプローチ (5章~8章)、III. 文法形式に対する認知的アプローチ (9章~11章) と続き、最終第12章が結論である。著者自身が序論で書いている通り、両筆者の担当部分の違いは明白で、Cruseの担当する第4章は同じくCruseの担当する第5章以降の導入も兼ねているため、第4章はむしろ第二部との結束性が強い。

本稿の構成は以下の通りである。まず序であるこの第一節に続き、第2節でCroftの担当した前半部分、第2章~第3章に関して検討する。第3節では、同じくCroftの担当した第9章~第11章に関して検討する。第4節ではCruseの担当した第4章~第8章に関して批判的に検討する。第5節はまとめである。

2. 第2章~第3章 (概念構造のCroft担当部分)

第2章 (フレーム) 第3章 (construal= 解釈/ものの捉え方) 第4章 (カテゴリー) が「言語分析に対する概念的アプローチ (A conceptual approach to linguistic analysis)」と呼ばれる第一部を構成しているが、Croftが第2章と第3章を、Cruseが第4章を担当しており、対象、方法、文体、流れに大きな変化があるため、まず、Croftの担当した概念構造に関する記述である第2章と第3章だけを取り扱う。

2.1. 第2章の概要

2.1ではFillmore (1982, 1985, 1977a, 1977b), Fillmore and Atkins (1992)などを挙げ、bachelor/spinsterなどの例から従来の語彙論の意味論が不十分であることを述べ、フレーム意味論の必要性が生じてきた背景を述べている。2.2では、radius/circleなどの用例から、Langacker (1987)における認知文法の枠組みがフレーム意味論と前提を共有していること

を主張している。この後、2.3でフレームと領域を大枠同義とし、スクリプトの概念がフレームの一例であること、理論の理論 (theory theory) における HORSE や HAMMER がそれぞれ生物学的存在、人工物的存在であることもフレームとして考えられること、一般分野と専門分野でフレーム (一般分野における MURDER の意味と、専門分野における MANSLAUGHTER と対比された MURDER の意味) が異なることなどを述べている。さらに、有名な LAND/GROUND、FLESH/MEAT、STINGY/GENEROUS、FETUS/UNBORN BABY などの例からフレーム意味論の有用性を説いている。

2.4ではフレーム意味論の拡張として Langacker における locational profile と configurational profile の相違、scope of predication の概念、basic domain と複合体としての abstract domain の概念、および、domain matrix, (ICM では cluster ICM) の概念を紹介し、アルファベットの “T” を例に挙げ、語の意味の定義に複数のフレームがどのように関わっているか例示している。2.5ではフレームと ICM を比較検討し、BACHELOR, MOTHER, LIE の研究例を挙げ、基本的には同義であると述べ、さらに、百科辞典的知識と辞書的知識の相違にも触れている。2.6ではメンタルスペース理論を紹介している。

2.2. 第3章の概要

第3章は解釈 (construal) 一般に関する検討の章である。同様の試みである Talmy のイメージング・システム (Talmy 1977, 1978, 1988) および Langacker の焦点調整 (focal adjustment) の理論をまとめ、Lakoff や Johnson の提唱するイメージスキーマに関連させて、4大項目、23小項目からなる解釈の表 (p.46) を作成し、個々に説明を加えている。

第3章の序論である3.1はイメージスキーマの導入も兼ねる。Johnson (1987) におけるイメージスキーマのリストを容器 (CONTAINER)、力 (FORCE) など7項目に整理し直している。3.2では Attention/salience (注意/顕現性) として、何に注目するかによって言語表現が異なること、外界には注目しやすい対象と注目しにくい対象があることを取り扱い、この項目に metonymy, reference point (参照点)、granularity (粒度)、subjective motion (主観的移動) などの現象を包括している。3.3は、Judgment/comparison (判断/比較) として、カテゴリー化、メタファー、フィギュアとグラウンドを集約している。3.4は、Perspective/situatedness (視点と視座) として、視点、ダイクシス (場面指示性)、主観性の用語と概念に説明を加えている。3.5では Constitution/Gestalt (構成/ゲシュタルト) として、team や archipelago など複数の成員からなるグループが一組の実体として捉えられる集合性の問題、動力学的関係の捉え方、circle と round など実体として捉えるか様態として捉えるかなどの問題が取り扱われている。

2.3. 第2章および第3章における興味深い点

Croft の優れた点はその構想力の壮大さである。ここでは、3つの点でブルドーザー的にならしの仕事をしている。

- (i) フレーム、領域 (domain) などが概して同義であること (p.15)
- (ii) イメージスキーマがいくつかの種類に分けられること (p.45)
- (iii) 解釈 (ものの捉え方: construal) が4つに大別できること (p.46)

(i) には、他にベース、スクリプト、ICMなども入る。それは以下のような記述でわかる。

The term frame (Fillmore), base (Langacker), and domain (Fillmore, Lakoff, Langacker) all appear to identify the same theoretical framework. (p. 16)

We subsume scripts under frames/domains. (p. 17)

Lakoff calls such a frame idealized cognitive model (ICM). (p. 28)

従来、認知言語学の中では、フレーム (Frames: Fillmore のフレーム意味論)、領域 (domain: Lakoff and Johnson, 1980 のメタファー理論)、ベース (base: Langacker, 1987 などの意味論)、領域 (domain: Langacker, 1987 などの概念構造論) の用語が並行して使用されており、すべて意味の成り立ちに関する言及であるにもかかわらず、Clausner and Croft (1999) までどのような関連になるのか、あるいはどう異なるのか十分な検討がなされてこなかった。これらをひとつの概念に統合することは認知言語学の発展のために重要な礎石であると思われる¹⁾

同様のことが (ii) に関しても言える。イメージスキーマという用語だけが先行する中で、この概念の種類分けやそれぞれの関連性に関して詳細な研究があったわけではなかった。イメージスキーマという用語や概念を使用する人はどのような意味で使用しているのかを明示する必要があり、その検討の際には本書で述べられているイメージスキーマの議論を無視できないであろう。さらに、(iii) では、Talmy のイメージング・システムと Langacker の焦点調整からひとつの壮大な解釈 (construal) のシステムにまとめ上げている。個別の理論に密着した議論が多い中、個々の理論の共通点と相違点を考えながら、認知言語学としての共通の概念と前提を明確化する先鞭をつけた本書は、新しい世界に一步踏み込んだものといえる。

やや、詳細になるが、その他、気がついた点に触れておく。(1) p.24 には、Langacker

に倣った basic domain と abstract domain の区分があるが、“directly embodied experience” の有無自体だけで両者を分けることができるのか。(2) p. 26 スキーマ関係とプロファイル/ベース関係を分けて考えることは難しいことが述べられている。(3) p.27 には、人間という概念の記述に関して、PERSON=HUMAN BEING; HUMAN BEING=LIVING THING+MIND; LIVING THING=PHYSICAL OBJECT+LIFE と主張していると思われる言及がある。それぞれが領域であり ICM であると考えれば納得もできないが、プラス記号は実際に何を意味することになるのか。また、この内容は Animacy Hierarchy や Lakoff and Turner の the Great Chain of being と似通ったものを対象にしていると考えられるがどのような記述が最適なのか。さらに、p. 27 のように素性分析とも取れる表記をすると、たとえば、X = non-PHYSICAL OBJECT+LIFE のような X も想定しうがこの点に関してはどうか。(4) p. 31 に“cluster ICM is essentially a domain matrix.”という重要な指摘がある。(5) p. 33 “Fauconnier replaces the notion of a possible world with that of a mental space.”という重要な指摘がある。(6) p.54 summary/sequential scanning と fictive motion に関する重要な区分がある。(7) p. 55 Sanction, full sanction, partial sanction に関する興味深い言及がある。(8) スペースとフレームは概念構造の二大組織化原則であると述べており、スペースに関する説明は非常にわかりやすく完結である。ただ、スペースとフレームがどのように異なるか、相違に関してもう一歩踏み込んで欲しかった。

2.4. 第2章および第3章における疑問点

この部分に対する疑問点は主に興味深い点の裏返しである。つまり大雑把な点が散見されるということである。大枠を作るという試みは現時点の認知言語学に重要であり、これをたたき台として詳細を詰めていくという観点から以下に疑問点を述べる。

上述の (iii) では、解釈 (construal) が4種類の項目に大別してあるが、これらは概念を整理して最良な形で提示したというよりは、説明の簡便さのためにひとまず近いと思われるものをまとめてみた、という程度の分類であるように見受けられる。分類に疑義が上がりうる概念の例として、Figure-ground の部分と Force dynamics の部分がある。

Croft のリスト (p. 46) では、Figure-ground は 3.4 (判断/比較) に含まれているが、3.2 (注意/顕現性) に含む方が合理的ではないか。Figure-ground という認知的特性は、意味の上では profile-base の対比として現れ、profile はもちろん顕現性に強く関わっている。さらに、profile shift の用例であるメトニミーや Active Zone も 3.2 に含まれているのである。

Force dynamics の振り分けは難しいが、現在 3.5 (構成/ゲシュタルト) に含まれている。力の関係が、押すもの、止めるもののせめぎ合いとやり取りからなる複雑なゲシュタルトを構成していることは認めるが、それをいうならフレームはすべてゲシュタルトである。

ここでいう構成／ゲシュタルトは、例示されているように個体の集合を一体と捉えたり、部分の集合を全体と捉えたりする人間の認知能力について一義的に語っていると思われるので、Force dynamicsに限ったことではない。有るものが「止まっている」か「抗している」かという意味では、見なし、すなわち判断に関わるものとして3.4 (判断／比較) と考えることもあり得るだろうし、あるいは両者に入ってもおかしくないのかも知れない。この問題に関して本稿で提示できる結論はないが、少なくとも p.46 のリストが叩き台であり、今後この表を始点として別のまとめ方や新しい機構を提示する研究が望まれることは示し得たと思う。

その他、注意点として二点を挙げる。まず、イメージスキーマの分類リスト (p.45) の中、FORCE の項に、RESTRAINT, EXISTENCE の項に REMOVAL とあるが、Johnson (1987) にはどちらも存在せず、RESTRAINT REMOVAL (止めていたものを外すこと) という表現が存在することからここは誤植または不注意による誤りではないかと思われる。

次に、第3章の結論に入っている内容が多すぎる。通常、結論では、その章や節で、すでに出てきたものをまとめる。3.6 には、どのように construal が働くかとして、入れ子構造になる、3つの原則があるなどが述べられているが、これは、新しい内容であり、結論に盛り込むにはあまりに重すぎる。さらに、p. 73 における解釈と文化相対論の問題も同様であろう。新しい表現 (世界の捉え方) をしたときには、ものの見方に影響があるが、その後慣習化して新規性を失ってしまう、という興味深い自説 (cf. Croft, 2001) を述べているが十分な説得力を持たせるためには、結論の項ではなく、一節を持たせて説明するべきではないか。

以上、本節では、Croft の担当した第2章および第3章を検討した。次節では同じく Croft が担当した文法構造に関する第9章から第11章を考察する。

3. 第9章～第11章 (文法構造)

第9章から11章は構文文法を取り扱っている。第9章でイディオムの検討、第10章で構文文法とその4つの判断基準を設け、Fillmore and Kay, Lakoff と Goldberg, Langacker, Croft を4つの判断基準で検討している。11章では使用依拠モデル (Usage-Based Model) について詳細に検討している。

3.1. 第9章の概要

第9章では、序論である9.1に続き、9.2でイディオムの問題を、9.3でイディオムと構文を、9.4で構文と構文文法の相違を取り扱っている。9.1では、Chomsky 理論のまとめを行っている。その中で、同理論が歴史的に、統語に属する不規則性であっても語彙部門 (辞書部門) に押し込めてきた過程を下位範疇化で考察したのち、Chomsky 理論で取り扱え

ないさらにやっかいな問題としてイディオムの話題に入っている。イディオムの分類に関する元資料は主に Fillmore et al. (1988) と Numberg et al. (1994) である。まず、イディオムの例として以下を挙げている。

- (4) a. It takes one to know one. (バカと言う方がバカ)
- b. pull a fast one (まんまと騙す)
- c. bring down the house (聴衆から大喝采を博す)
- d. wide awake (すっかり目を覚ました)
- e. sight unseen (あらかじめ調べずに)
- f. all of a sudden (突然)
- g. (X) blow X's nose. (鼻をかむ)
- h. Once upon a time,... (むかし、むかし...)

イディオムのプロトタイプ的定義は Numberg et al. (1994) によれば a. 文法的不自由さ、b. 彩、c. ことわざらしさ、d. くだけた用法、e. 評価的情緒的意味であるという。また、Fillmore et al. (1988) から、イディオムの4つの区分を挙げている。

- (i) encoding idiom と decoding idiom (Makkai, 1972)
- (ii) grammatical と extragrammatical
- (iii) substantive と formal
- (iv) pragmatic point があるものとないもの

(i) では *answer the door*, *wide awake*, *bright red* など、聞けば意味がわかるが自分で組み上げることができないものを encoding idiom と呼び、一方、*kick the bucket* や *pull a fast one* のように、聞いてもわからないものを decoding idiom と呼んで区分している²。(ii) では、*first off*, *sight unseen*, *all of a sudden*, *by and large*, *so far so good* のような文法的ではないイディオムを extragrammatical として区分している。(iii) では、*blow X's nose* や *The X-er, the Y-er* のように、ある部分がスケルトンになって他の語彙項目が挿入できるものを formal と呼んでいる。(iv) では *Good morning*, *See you later* などの挨拶、*Once upon a time* などの談話文体的なもの、*Him be a doctor?!* など特定の状況や情緒と共に用いられるものを区分している。最後にこれらをまとめて、語彙的に不規則なもの、組み上げが不規則なもの、意味が特殊化しているものの三点からイディオムの類型を提示してした Fillmore et al. の研究をまとめている。

9.3、9.4ではスキーマ的イディオム構文として Chomsky 理論では等閑視されていたイ

ディオムが如何に統語にまで及んでいるか、語彙と統語の連続性を説得力を持って示している。まず、Fillmore et al.の *let alone* 構文の研究を紹介し、同構文の持つ統語的、意味的、談話語用論的特徴に関する議論を十全に再録している。さらに、Lakoff (1987) における *There* 構文の研究、Michaelis and Lambrecht (1996) による外置構文の研究、認知言語学外の分野から Prince (1978) における It-cleft, wh-cleft の談話機能の研究、Wierzbicka (1988) から Have a V 構文の研究と N is N 構文の研究、Jackendoff (1990) における 'time'-away 構文への言及と、有名な Goldberg (1995) の構文に関する金字塔的研究までの構文研究を詳細に拾い上げている。紙面の都合上その議論にまでは立ち入れないが、構文および構文の持つ談話・語用論的機能にご興味のある方はぜひご一読いただきたい。

3.2. 第10章の概要

第10章では、10.1で構文文法を記述する判断基準を、10.2では10.1で提示した判断基準をもとにして、4つのモデルを分類している。構文文法を判断する基準として、Croftは独自の基準として以下を提示している。

- (i) どのような文法範疇を用いるか (動詞、名詞など) (p. 260)
- (ii) どのような文法関係を用いるか (主語、述語など) (p.262)
- (iii) 構文同士の関係にはどのような種類を認めるか (p. 265)
- (iv) 構文の情報はどのように記憶されているか (p. 265)

これだけでは不明確であるが、10.2の4つのモデルを検討することによって明確になると思われる。ここでいう4つのモデルとは、Fillmore and Kayの一連の研究、Lakoff (1987) および Goldberg (1995), Langackerの一連の研究, Croft (2001) である。

まず、Fillmore and Kayは、(i) と (ii) に関し、[cat v] (文法範疇は動詞)、[gf sbj] (文法機能は主語) などの文法範疇、文法関係を用いるため要素還元的である。また、(iii) と (iv) に関し、Fillmore and Kayは完全な継承 (complete inheritance) のみを認める。例えば、主語以外が wh 句となる wh 疑問の構文は、LI (left-isolation: 特定要素を左端の有する) 構文と SAI (Subject-Auxiliary Inversion: 主語助動詞倒置) 構文から継承を受ける。これをカテゴリー理論の面から見ると、継承するかしないか、1か0かの古典的カテゴリーであり、情報の記憶の面から見ると重複排除型であると言う。

次に、Lakoff (1987) および Goldberg (1995) について述べている。(i) では Goldberg (1995) の participant role (参与者役割) に関して述べ、robber や victim という役割は rob/steal 特有であるから要素還元主義的ではないが、主語述語という文法関係、動詞などの文法範疇を使用する点は要素還元的であると言う。(iii) の構文間の関係としては、instance

link, subpart link, polysemy link, metaphorical link などを使用し、これらはデフォルトとその変更、および多重継承を許す非古典的カテゴリーであり、情報の記憶の面から見ると重複許容型であると言う。

次に Langacker (1987) 他について述べている。ここでは、Langacker の認知文法モデルを構文文法的一种として取り扱っている。(i) について言えば名詞、動詞などの文法範疇は認められているものの、形式と意味を同時に取り扱う認知文法の立場からは、文法範疇はほとんど意味に動機づけられておりその意味で要素還元主義ではないと述べる。さらに、(ii) における文法関係も結合価が elaboration-site と elaboration という意味的な関係の側面を持っていることが強調されている。(iii) の構文間の関係に関しては、語彙と構文に統一的なカテゴリー観（非古典的）を有することが述べられている。(iv) に関しては使用依拠モデルの観点から重複許容型であるという。

最後に Croft (2001) が述べられるが、これは、非古典的カテゴリーを前提として重複許容型である部分は Lakoff (1987) および Goldberg (1995)、Langacker (1987) と軌を一にしているが、文法範疇と文法関係がすべて構文に依存して決定されるという点がその名称 (“Radical” Construction Grammar) の所以であるという。詳細は、Croft (2001) を参照のこと。

3.3. 第11章の概要

第11章は、やや趣を異にし、11.1で文法表示とそのプロセスを、11.2で使用依拠モデルに基づいた形態論を、11.3で使用依拠モデルに基づいた統語論を取り扱っている。11.1で語彙や構文はルールでもリストでもなく連続していることを述べた後、11.2、11.3で、Bybee (1985) などの研究から使用依拠モデルについて述べている。使用依拠モデルでは、type frequency と token frequency を分け、それぞれに関して以下のような仮説を紹介している。

- (i) 単語の定着度はトークン使用頻度の関数である。(p. 293)
- (ii) スキーマの生産性はタイプ出現頻度の関数である (p.296)

(i) は例えば、使用される頻度が非常に多い、be 動詞などの場合、不規則な形式 (am, are, is, were, etc.) でも定着してしまうということである。(ii) は例えば、-ed という過去形は、様々な単語がこの過去形を取るため生産性が非常に高いが、-w などの過去形 (flew, blew など) はこの過去形を取る単語数が少ないため生産性が低いということである。さらに、11.2では、ルール型でない頻度型に整合性のある特徴として、source-oriented スキーマだけでなく、product-oriented スキーマについて述べている。

(iii) 変化形で規定される派生が存在する（これは派生ルールによる記述が困難である）

これは、例えば[-ung]という過去分詞形で、いったんこのスキーマが活性化されてくると、様々な現在形からこの過去分詞形への活用が増える。こういった場合、派生モトの構造に依拠してルールを記述する従来の生成的思考方では記述が困難である。最後に、次のような仮説も形成されている。

(iv) 単語同士の結びつきの強さは、類似性の関数である。

類似性には意味の類似性と形式の類似性が存在し、意味の類似性の方が重要である。

11.2 は統語における使用依拠モデルとして、同様の原則が統語においても成立することを検証している。詳細は紙面の都合で割愛する。

3.4. 第9章から第11章における興味深い点

第9章から11章まで、Croftの手になる認知言語学の統語に対する研究を見てきた。いくつかの注目すべき特長はその独自性である。まず、Chomsky理論の欠点を補う代替案として構文文法を提示していること。次に、イディオムと構文文法を連続して捉えていること。最後に使用依拠モデルを配してBybeeの類型論や認知心理学との橋渡しを試みていることである。以下、それぞれについてもう少し詳しく述べる。

通常の認知言語学の説明ではChomsky理論の説明はあまり登場しない。Croftは第9章の始め約5ページを費やしてChomsky理論についても触れているため、認知理論とChomsky理論の相違点が大変明確になっている。また、下位範疇化や語彙部門に閉じこめられたイディオムの視点からその根幹を揺さぶっていく展開には説得力がある。

また、通常は等閑視されがちなイディオムという現象を構文と関連づけた点で、Fillmore et al.の精神を十分に汲んだ明快な説明となっている。さらに、Fillmoreら以外に幅広い分野から語用と意味・形式を同時に考えるべき証左を集めてきているところが評価できる。さらに、11章は、やや難解ではあるものの、Langacker理論などで繰り返し主張されている使用依拠モデルをできる限りわかりやすい形で提示したものと評価できる。

3.5. 第9章から第11章における疑問点

一方で認知言語学を学んできたものにとってはやや意外な点、正統でないと感じられる点もいくつかある。Langackerの認知文法の取り扱いおよびCroft自身のRadical Construction Grammarの取り扱いである。

Langackerの認知文法は、通常の認知言語学の入門書であれば、ひとつの章または複数の

章を割いて説明がなされるが、本書では構文文法の一つとして一小節に閉じこめられている。この是非は別として意外という印象は免れない。もちろん、Langacker の研究自体は概念構造に関する第一部などにその多くはちりばめられているし、使用依拠モデルも Langacker の重要な主張ひとつである。それでも、Langacker の文法観と様々な概念がひとつにまとめられていないのは、認知言語学の研究を紹介する書としてはやや物足りない感がある。もちろん、逆に言えば、第一部と同様、認知言語学の新しい土壌を整備するために、認知の他の理論との共通性と相違を検討する目的で敢えて解体を試みたという見方は成り立つ。

また、第 10 章の構文文法の比較は意欲的だが荒削りに見える。また Croft 自身の Radical Construction Grammar に関する説明はやや多い気がする。これは作者の特権と言えようか。次節で述べる Cruse に比べればまったく普通にも見える。

いくつか個別に目を引いた点を加えておく。(1) p.245, p.255 Chomsky 理論における選択制限や下位範疇化を認知的な言語理論でどう考えるかも興味深い点であろう。前者と後者は連続しているだろうし、前者はメタファーとも関連する。(2) p.259 この図は正しい関係を示しているのか今ひとつわからない。(3) p.280- e-site が結合価を意味的に動機づけたものであるという説明は手際よい。(4) p.285 動詞や名詞という文法範疇を排除してしまって本当にうまくいくのだろうか。また、「名詞」の代わりに「THING」という意味的なカテゴリーにしたからといって要素還元主義でなくなるものだろうか。

本節では、第 9 章から第 11 章から認知言語学の文法構造に関する言及を検討した。次節では、Cruse が担当する第 4 章から第 8 章を批判的に検討する。

4. 第 4 章～第 8 章 (カテゴリー、多義、語彙の意味論)

さて、Cruse の部分には、いくつかの大きな問題点が存在する。Cruse は、第 4 章から第 8 章を担当している。本節では、まず、第一部に属する第 4 章の中からカテゴリーに関する部分を単独で取り扱いその概要と問題点を指摘する。次に 4 章の後半および第 5 章から第 7 章までをまとめて取り扱いこの概要と問題点を指摘する。最後の第 8 章に触れてこの概要を述べ内容を検討する。

4.1. 第 4 章 (カテゴリー部分) の概要と問題点

第 4 章はカテゴリーについての章である。そこでの話題を拾ってみよう。まず、導入である 4.1 の後、4.2 でカテゴリーに関する古典的モデルを紹介し、4.3 でプロトタイプ理論を紹介し、4.4 で Dynamic Construal Model のカテゴリー観の説明をしている。

早速、問題点に入る。いくつかのレベルで首をかしげることがある。まず、カテゴリーに関する章であるのに認知的なカテゴリー理論に関する言及はそこそこに、後半は自身の

Dynamic Construal Model の説明に入ってしまったこと。次に、認知言語学のカテゴリー理論の紹介であるはずなのに、4.3でプロトタイプ理論に対する非建設的と思われる批判を行っていること。さらに、その批判が主に意味素性理論に基づいたプロトタイプ理論に対するものであること、などである。ひとまず、実質的な議論として成立し得る最後の件に関して検討する。

Cruse はプロトタイプ理論に対する批判として以下を挙げている。

- (i) 素性リストの単純なモデルであること (p.87)
- (ii) 「奇数」のパラドックス (p.88)
- (iii) 素性の問題
- (iv) 対立するカテゴリー
- (v) カテゴリーの境界の問題

記述を見ればわかるように (i) と (iii) は素性に関する批判である。素性分析(チェックリスト理論)に関する批判は Fillmore (1975) 以来、認知言語学で周知の重要な問題であり、認知言語学者で素性分析を使用する人は少ないし使用する場合でも無批判にこれを行うことはしない。にもかかわらずプロトタイプ理論を素性理論に結びつけるのは不明のそしりを免れ得ないであろう。

それ以外の批判も大きな問題となり得ない。(ii) で3が689より「奇数」らしいというプロトタイプ効果を生じるのは、奇数自体が実は理想世界で考えるような必要充分で捉えられるカテゴリーでないからだろうし、(iv) で対立するカテゴリー(DOGとCATなどの相違)に負の素性を導入する必要があるかもしれないと奇妙なことを述べているが、百科事典的意味観に基づく認知言語学ではDOGとCATを区分するのに何ら問題は生じない(例えば両者の視覚的印象のスキーマひとつあれば相違は明白であろう)。(v) カテゴリーの境界線の問題(グライダーは飛行機の周辺事例(下位範疇)であるがグライダーの下位範疇であるハンググライダーは飛行機ではない、など)は興味深い、プロトタイプのカテゴリー観や、家族的類似によるカテゴリー観に取って問題となる度合いより、古典的カテゴリーに対して問題となる度合いの方が遙かに大きいと思われる。

この他、この章における疑問点をいくつか箇条書きで述べる。(1) 家族的類似に関する言及がない。(2) p. 86には「生物学的な分類は世界中で驚くほど似ている」とあるが、民間分類では大きく異なるのではないか。(3) p.95 カテゴリーの境界線に関して“boundary is a line of demarcation between ‘inside’ and ‘outside’.”とあるが、《カテゴリーは容器である》というメタファーを通して境界線概念が発生するのであり、「容器」「線」「境界」がすべてカテゴリーの捉え方のひとつに過ぎないことを Cruse は気づいていないフシがある。(4)

p.96 「DOG フレーム」という用語を使用しているが、Croft や Langacker に従えば、DOG フレームは存在せず、実体、生物、動物、ペットなど様々なフレームからなる domain matrix となろう。(5) p.97 「dynamic construal approach のような ('on-line'的な) アプローチは認知言語学者の間でも“not uncommon”であり Lakoff and Sweetser (1994) もそのように述べている」という趣旨のことが書かれているが、Lakoff and Sweetser (1994) はメンタルスペース理論の序であり、メンタルスペース理論はもちろん'on-line'的な意味の理論であるが、意味論すべてを'on-line'的に処理することを支持しているとするのは曲解である。

4.2. 第4章の後半および第5章～第7章の概要と問題点

4.4 で Dynamic Construal Model のカテゴリー観の説明、4.5 で意味の Dynamic Construal、4.6 で構造的論理的意味の視座に関して述べている。第5章は多義についてである。5.1 の導入の後、5.2 で同音異義語と多義、5.3 で Sub-sense と Near-sense について、5.4 で、Autonomy について取り扱っている。第6章では、Hyponymy、と Metonymy について取り扱っている。第7章では、7.1 Oppositeness、7.2 Complementarity、7.3 Antonymy、7.4 対義語等の可変的解釈について述べている。

一般的な問題点としては三点挙げられる。第一に、これら三章と半分が、認知言語学ではほとんど知られていない Dynamic Construal Model に基づいていることである。この理論の根本的な精神は「意味の弾力性」であり、その面では認知言語学と整合性があるが、他方、purport, constraints, cognitive effort, pre-meaning, facet, microsense, contextual modulation などの聞き慣れない専門用語が使用されており、その理論的枠組みや前提には認知言語学と異なる部分も多い。そのひとつが第二の問題点で、意味記述に素性のようなものを使用していることである。facet と名付けられたもので、bank の例 (p.116) などでは、[PREMISES], [PERSONNEL], [INSTITUTION] とフレームのようにも見えるが、stallion に対する記述 (p.139) では、[EQUINE], [MALE] と意味素性としか見えないものを使用している。第三に、認知言語学における多義に関する研究がまったくと行っていいほど取り上げられていないことである。Over の研究 (Lakoff, 1987 に紹介された Brugman の研究) を始めとする空間認知に関する一連の研究など、メタファーリンク、メトニミーリンク、イメージスキーマ変換を使用した認知言語学における多義分析の成功例がひとつも紹介されていない。Tuggy の重要な ambiguity, polysemy, vagueness の研究に関して (p.131) は、Dynamic Construal Model (の中の Microsense の考え) と競合する理論として提示され、本旨はどこえやらオリジナルよりもずっとわかりにくい説明を与えられ、その後、批判される。ここだけを見ると、認知言語の本というよりは反認知言語の本に思える。

もちろん、Cruse 自身は語彙意味論の優れた研究者であり、今回の内容も Cruse の理論として見れば興味深い点も数々見られるが、“Cognitive Linguistics”という名のテキストでそ

れを展開するのは読者に対する欺瞞であろう。さらに、同じ研究対象（例えば多義）に対して膨大な認知言語学的研究がなされているにも関わらず、それらの研究を自説と比較もしないし、紹介もせず、単に自分の理論と用語のみを積み重ねるとするのは研究者としての良識すら疑われかねない。

この他、気の付いた点をランダムに挙げる。(1) p.105には構成性の原理に関する言及が見られるが、百科辞典的知識を想定し解釈を許すなら構成性の原理に固執する必要はないであろう。(2) p.109 多義の項なのに典型的な同音異義語である bank ばかり例に使うのは多義に対する理解を疑う。(3) “We can portray the total meaning potential of a word as a region in conceptual space”と述べているが不確かな前提がいくつもある。“total”とは何か、“potential”とはどういう意味か、“conceptual space”は物理的場所か、など。「異なる意義すべてが存在する脳の部位」が存在するという意味ではなかろう。(4) p.127 *knife* の用例は Langacker の domain matrix という概念ですでに大変きれいな整理できていると思うがこれに対する言及がない。(5) p.133 あるナイフ（食事用）が別のナイフ（文房具）に “metaphorically extend” とあるがここで比喩拡張はありえなからう。(6) p.137 で Pustejovsky (1995) のクオリア構造をそのまま WOS (way of seeing) に置き換えているが名前だけ変えるのはなぜか。(7) p.139 *overworked stallion* の例で「牡として」と「馬として」の多義が生じることを述べており、用例は面白いがこれを active zone で分析するのは誤りであろう。active zone は領域内で起こる現象であり、「牡」と「馬」をまたいで存在する領域は考え得ない。

4.3. 第8章の概要と検討

第8章はメタファーを取り扱っている。8.1における導入の後、8.2では概念メタファー理論の紹介、8.3でメタファーの履歴という自説の紹介、8.4で隠喩と直喩、8.5でメタファーとメトニミーを取り扱っている。

結論からいうとこの章はまとまった内容となっている。中心となる8.2には Croft の手も入っているという。8.5は過去の研究をうまくまとめている。8.3, 8.4は認知言語学でよく取り扱われるテーマではないが興味深い内容となっている。8.3はメタファーと表現の慣習化の問題に光を投じている。8.4は直喩と隠喩の連続性に関して明示した研究である。以下、中心となる論点をいくつか述べる。

認知メタファー理論の紹介に続いて、8.2.2では十分に文節化された書き方ではないがまとめると以下の論点が提起されている。

- (i) メタファーの記述レベルについて (p.198)
- (ii) メタファー表現の生産性について (p.199)

- (iii) メタファー同士の関係について (継承) (p.199-200)
- (iv) メタファー同士の関係について (分解と合成) (p.200)
- (v) 起点領域と目標領域を結ぶ「共通領域」の設定に関して (p.201)
- (vi) 慣用メタファー表現と新奇なメタファー表現およびイメージメタファー (p.203)

(i) では《議論は建物である》に対して Clausner and Croft (1997) の《議論の説得力は建物の構造的一体性である》というより詳細なレベルを主張している。(ii) ではメタファーによってメタファー表現が多く自由度が高いものと、少なく自由度が低いものがあることが指摘されているが、これは新しい指摘ではない。(iii)、(iv) ではメタファー同士の関係として上位下位関係となる継承と Grady の提唱したプライマリーメタファーに対する言及がある。独自の主張がなされていると思われるのは (v) と (vi) である。(v) は目標領域に構造があるのならば、両者の構造照合である「共通領域」を設定しても良いではないか、という主張である。(vi) は概念メタファーとイメージメタファーの区別を廃してはどうかという提案である。両提案とも十分に検討の価値があろう。メタファーに興味のある読者なら《議論は建物である》に関して、Lakoff and Johnson, Clausner and Croft および Grady に Kövecses (Kövecses, 2002, pp.127-134) も合わせて多面的に検討し、どの表記が望ましいか研究されてみてはいかがだろうか。

この他、気がついた点を挙げる。(1) p.196 *in* や *out of* の用例から TIME IS SPACE や、STATES ARE CONTAINERS といったメタファーを挙げているが、これは概念メタファーの説明として標準的な例ではなく、よくない例示である。(2) p.198 メタファー理論の記述から大変重要な経験的基盤の概念の説明が欠如している。(3) p.200 LOVE IS A CAR TRIP/SEA VOYAGE とあるが、これらは原典でメタファーとは言われていない。継承のよりよい例は Lakoff (1993) を参照。(4) p.201 Invariance Hypothesis に ‘overrides’を加えたものは Invariance Principle と呼ばれている。(5) p.204 “metaphor.....is first coined...” という表現があるがメタファーとメタファー表現の区分が明確に理解されていないようだ。

5. まとめ

本稿は Croft and Cruse (2004) を取り上げ、その内容を検討した。まず、Croft が担当した概念構造に関する第2章と第3章、次に Croft が担当した文法構造に関する第9章から第11章、最後に Cruse が担当した第4章から第8章の順に紹介した。Croft が担当した第2章～第3章および第9章～第11章、Cruse が担当した部分のうち、第4章の前半、および第8章は概して認知言語学の優良な入門書となっているのに対し、Cruse が担当した第4章後半～第7章は認知言語学のテキストというよりは、主に Dynamic Construal Approach という

手法を利用した語彙意味論の紹介となっている。このアプローチは認知言語学と多くの前提を共有するものの、多くの前提を異にしている。また、このアプローチの紹介を行ったために認知言語学の多義研究など記載すべき多くの重要文献の紹介がなされていない。読者はこの点に留意するべきである。

それ以外では、認知言語学の基本概念の道具立てを整理して再提示しようとする意欲が一貫して認められ、認知研究者にとっても難解な部分もあるが読み応えのあるものになっている。

注

- 1) また、フレームの複合体としての domain matrix の考え方も重要でその内容は p.26 の “T”に関する記述に縮約されている。
- 2) これは Numburg et al. (1994) で、それぞれ *idiomatically combining expressions* と *idiomatic phrases* と呼ばれているという。

参考文献

- Bybee, J.L. 1985. *Morphology: A Study into the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Clausner, T. and W. Croft. 1999. “Domains and Image Schemas.” *Cognitive Linguistics* 10-1, 1-31.
- Croft, W. 2001. *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore C. J. 1975. “An Alternative to Checklist Theories of Meaning.” *Proceedings of the First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 123-131. Berkeley: Berkeley Linguistic Society.
- . 1977a. “Scenes-and frames semantics..” In A. Zampolli ed. *Linguistic Structures Processing*. Amsterdam: North-Holland Publishing.
- . 1977b “The Case for Case Reopened.” In P. Cole and J.M. Sadock eds. *Syntax and Semantics 8: Grammatical Relations*. 59-82. New York: Academic Press.
- . 1982. “Frame Semantics.” In The Linguistic Society of Korea ed. *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin Publishing. 111-38.
- . 1985. “Frames and the Semantics of Understanding.” *Quaderni di semantica* 6, 222-54.
- Fillmore, C. and B.T. Atkins. 1992. “Toward a Frame-based Lexicon: The Semantics of RISK and its Neighbor.” In A. Lehrer and E. Feder Kittay eds., *Frame, Fields, and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. 75-102.
- Fillmore, C.J., P. Kay and M.K. O'Connor. 1988. “Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of Let Alone.” *Language* 64: 501-38
- Goldberg, A. 1995. *Constructions*. Chicago: University of Chicago Press.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- 河上誓作 編著 1996. 『認知言語学の基礎』東京: 研究社出版.
- Kovecses, Z. 2002. *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

- Lakoff, G. 1987. *Women ,Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作 他訳 『認知意味論—言語から見た人間の心』東京：紀伊国屋書店. 1993年.)
- . 1993. “The Contemporary Theory of Metaphor.” In A. Ortony ed. *Metaphor and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and E. Sweetser. 1994. “Foreword to Gilles Fauconnier,” *Mental Spaces*, ix-i 1 vi. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, R. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- Lee, D. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Makkai, A. 1972. *Idiom Structure in English*. Mouton: The Hague.
- 松本曜 編 2003. 『認知意味論』 東京：大修館書店.
- Michaelis, L. A. and K. Lambrecht. 1996. “Toward a Construction-based Theory of Language Functions: The Case of Nominal Extraposition.” *Language* 72, 215-47.
- 西村義樹 編 2002. 『認知言語学 I: 事象構造』 東京：東京大学出版会.
- Nunberg, G., I. A. Sag and T. Wasow. 1994. “Idioms.” *Language* 70, 491-538.
- 大堀壽夫 編 2002a. 『認知言語学 II: カテゴリー化』 東京：東京大学出版会.
- 大堀壽夫 2002b. 『認知言語学』 東京：東京大学出版会.
- Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, Mass. : The MIT Press.
- 坂原茂 編 2000. 『認知言語学の発展』 東京：ひつじ書房.
- 杉本孝司 1998. 『意味論 < 2 > 認知意味論』 東京：くろしお出版.
- Talmy, L. 1977. “Rubber Sheet Cognition in Language.” *Papers from the Thirteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*. 612-28. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- . 1978. “The Relation of Grammar to Cognition: A Synopsis.” In D. Waltz ed. *Proceedings of TINLAP- 2: Theoretical Issues in Natural Language Processing*. 14-24. Urbana: University of Illinois Coordinated Science Laboratory.
- . 1988. “The Relation of Grammar to Cognition.” In B. Rudzka-Ostyn ed. *Topics in Cognitive Linguistics*. 165-205. Amsterdam: John Benjamins.
- 辻幸夫 編 2002. 『認知言語学キーワード事典』 東京：研究社.
- . 編 2003. 『認知言語学への招待』 東京：大修館書店.
- Ungerer, F. and H. J. Schmid. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman. (池上嘉彦他訳 『認知言語学入門』 東京：大修館書店. 1993年) .
- Wierzbicka, A. 1988. *The Semantics of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』 東京：ひつじ書房.
- . 2000. 『認知言語学原理』 東京：くろしお出版.